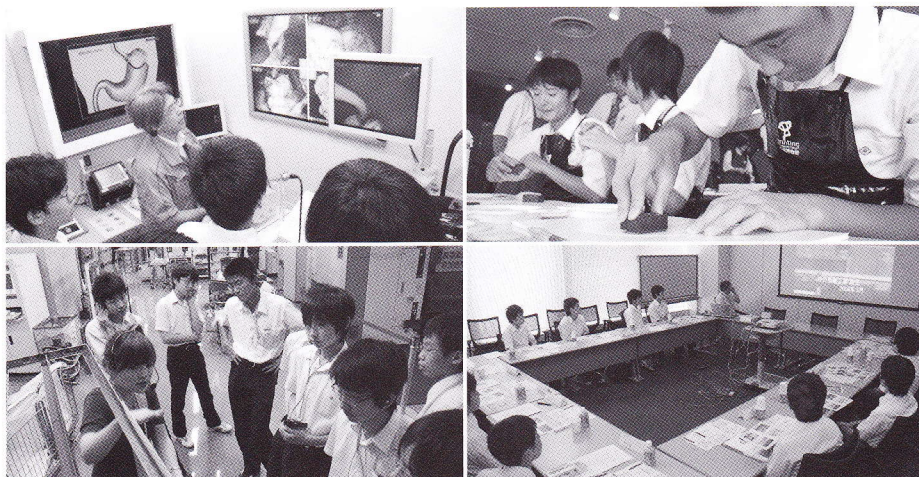


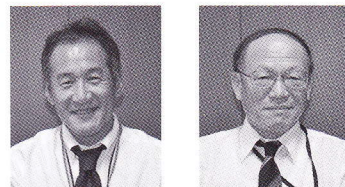
子供達が職業について考える「キャリア教育」が、産業構造や雇用形態の変化を見直されつつあります。進路を意識するのは早ければ早いほうがよいはず。しかし自らを振り返り、子供の頃から将来を考えていたかといえば、苦笑いを浮かべる方がほとんどかもしれません。通常は高校卒業前から職業を意識すれば早いほう、大学でも熱心な企業研修が行われている学校は珍しいといわれますが、付屬中高では中学3年生から、高度な企業研修を軸とした「キャリア・スタディ」が行われています。

## 付屬中高

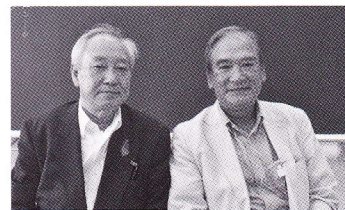
## キャリア・スタディ



「企業研修」の様子。訪問先はフジノン(左上)、凸版印刷(右上)、日経新聞(左下)、中外製薬(右下)。



相澤隆宏 主幹教諭 伊藤公紀 教諭



同窓会のキャリアスタディ小委員会・青木良雅委員長(左)、梅田博夫副会長(右)

## 同窓会と二人三脚で、新たなキャリア教育を模索

付屬中高がこの「キャリア・スタディ」に取り組み始めたのは今から3年前。その前身ともいえる活動から数えると、この取り組みは7年目を迎えます。中学3年生を対象に、毎年6月に始まるさまざまなプログラムをこなしながら、子供たちは2月までの約8ヶ月をかけて、職業選択とはどういうものかを、じっくり考えることになります。

付屬中高の場合、高校2年生からの文系・理系の選択を、高校1年時に迫られますが、どこの学校でも、進路は科目の成績や模試の結果を見比べながら、決められていくのが一般的。同校もまた、長きにわたり例外ではありませんでした。しかし教員の中に「将来の職業や、人生のプランニングに関わる進路選択を、成績だけで決めることに違和感が生まれた」ことをきっかけとして、キャリア教育への考え方が大きく変わり始めたそうです。

当初は専門業者のプログラムを導入した取り組みが4

年間にわたり行われました。企業訪問なども盛り込んだものですが、残念ながらプログラムの本質的な点で、いくつかの課題が生じたそうです。「訪問先は有名な企業ばかり。ところが始めてみると、30名もの大人数で訪問し、生徒が「お客さん」になってしまう。正直なところ、社会科見学の域を脱していないと感じました」(相澤主幹教諭)。既存のプログラムでは「やらされている」という義務感だけが先行し、職業意識は芽生えないと感じた同校では、自らのイメージに合った教育プログラムを、自ら作成することになったのです。

## 生徒が教員に頼らず進行する「企業研修」

現在行われている「キャリア・スタディ」の大きな流れは、以下の通りです。

- ①スタート集会、ポートフォリオ講座、「業(わざ)あり先生」、自分史作文(6月)
- ②マナー講座、身のまわりの社会人インタビュー(7月)
- ③企業研修(28企業を41班(3~7名)で訪問。  
コーディネーター 23名)
- ④個人レポート作成、柏苑祭にて発表(9~10月)
- ⑤発表会、OB大学生講演会(1~2月)

このうち最大の特徴は、なんといっても250名の生徒を3~7人ずつ、28もの企業に送り込む「企業研修」です。これは企画から準備、運営まで、学校と同窓会OBがタイアップして行う珍しい取り組み。教員は事前のお膳立てのみで同行せず、生徒がコーディネーター役のOBと協力しながら、企業への連絡から当日の進行までをすべて自分たちで行います。「キャリア・スタディ」とはいうなれば、この企業研修を中心とした、準備と評価、反省のプロセスから成り立つもの。生徒はこの企業研修を独力で乗り切ることで、社会と接する最初の訓練、実践を経験し、その中で「職業とは何か」を繰り返し自問することになります。また知識も“人から与えられる”ものではなく、“自らが主体的に獲得した、経験を伴った知識”として身につけることで、将来を自分自身の問題として認識し、また進路選択のための眼を養う・・・これが「キャリア・スタディ」の意義だといえるでしょう。

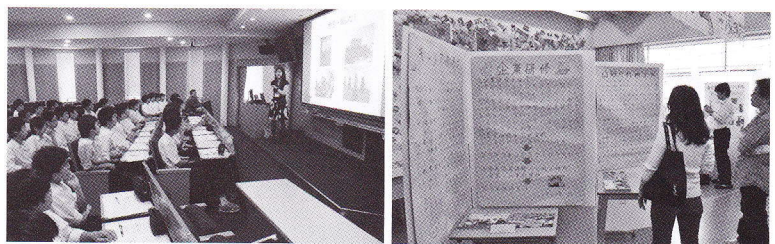
## キャリア教育から「人生の先輩」との交流も

こうした取り組みは、コーディネーターでもあるOBの皆さんの協力を得て、初めて実現することができました。新たなキャリア教育プログラムを模索する学校側が同窓会に相談したことに始まり、同窓会も「かわいい後輩たちのため」ほとんど実費のみの手弁当で、本業の合間を縫って研修先企業の選定と橋渡し、研修への同行などを行っているそうです。当初は難航した時期もあったそうですが、それでも手探りの中、実現にこぎつけました。現在同窓会の理事でキャリアスタディ小委員会委員長も務める青木さんも、武蔵工大の卒業生として関心のあった「理科離れ」解決の一助として、また校名変更を経て新しい名前になっても、以前から

の後輩思いの校風、武蔵工大の良さを引き継いでいってもらいたい、そんな思いから参加を決めたそうです。

この活動ではOBが年間を通じて生徒と交流し、先生とは違う「人生の先輩」として、時に優しく、時には厳しく、生徒のよき相談相手となっています。一方で、OBも後輩との出会いの中で、昔を振り返ったり、中学生から学ぶことが少なくないとか。本活動の牽引役でもある同窓会副会長の梅田さんは、「3年も続いているということは、こちらも楽しいということ。おとなしかった子が、会うたび声をかけてくれるようになったりすると、やはりうれしいですね。子供には、単なる職業選びだけではなく、仕事や家庭、生き方などだんだんと人生の問題として関心を持ってもらいたいと思っています」と語ってくれました。

梅田さんは3年間の活動を振り返り「本来は家庭で行われるべき、お父さんの仕事や人生の苦勞を子供に聞かせる機会が、今は少なくなっているのかもしれない」といいます。企業の仕事内容が多岐にわたること、親子のコミュニケーションの場が少ないことなどもあり、最近では「親の仕事がよく分からない」という子もいるとか。キャリア・スタディでは「身のまわりの社会人インタビュー」などで親や親戚の職業を調べてもらうことで、将来の職業を身近な問題として考えたり、家庭内で会話をするきっかけともなっているそうです。このキャリアスタディを始めてからは、「子供が急に家でいろいろ話し出すようになって驚いた」、「子供が家に帰るなり『将来の仕事を決めた!』』と言い出し、逆になだめた」などの反響があり、中には「自分は○○○になりたい。そのため何の勉強が必要なのかを、これから調べたい」といった子もいたとのこと。少なくとも考えるきっかけ作りという点では、この取り組みは予想以上の成果を挙げているようです。



(左)6月の講習会「業あり先生」の様子。お医者さんや技術者、公認会計士など、12人の先生が職業について講演を行う。(右)「柏苑祭」でのレポート展示の様子。